

森山医院建築コンセプト

はじめに

現代の日本を取り巻く環境は非常にめまぐるしいもので、超高齢社会、少子化、環境問題、エネルギー資源の不足、物価の高騰など、今までと同じ価値観で生活をしていても、無理が生じてくるということに、みんなが気づき始めており、徐々に実践に移す段階に来ています。

今までとは異なる価値観への転換期「パラダイムシフト」。

「医療」の世界でも、例外ではなく、この「パラダイムシフト」の波は襲ってきているように感じます。

高齢者が増えていく＝病がちな人が増えていく

少子化＝子供たちに対するより安全で健康的な環境の提供が求められる

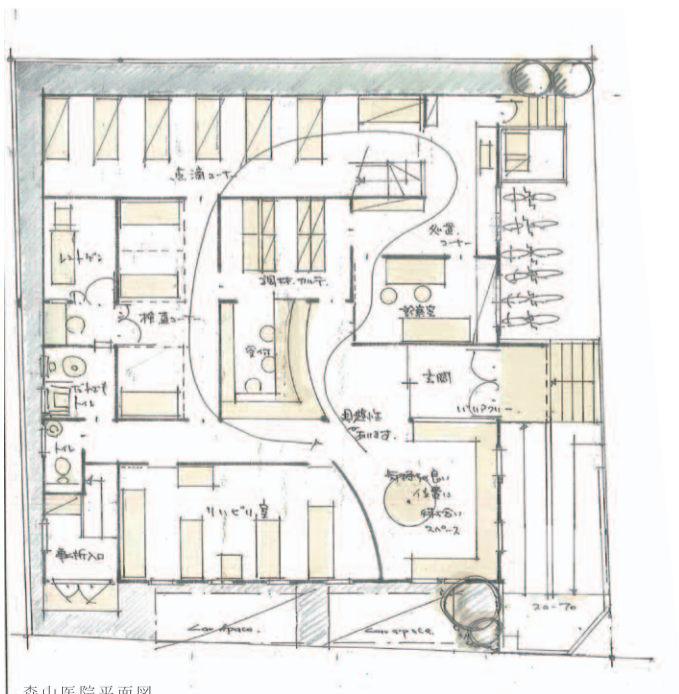
環境問題・物価の高騰＝コストがかからず、かつ環境にも良いより効率的な仕組みの構築

上記を考えると、医者と患者とは、必ずしも「医療行為」を介さなくとも、関係しあうことがこれからの社会では求められているように感じ、それが、医療分野における「パラダイムシフト」の一つであるのではないかと考えました。そして、それを具現化していくことが、森山医院の本計画における挑戦であり、その思想をいかに建築として表現していくかが、私の課題でありました。

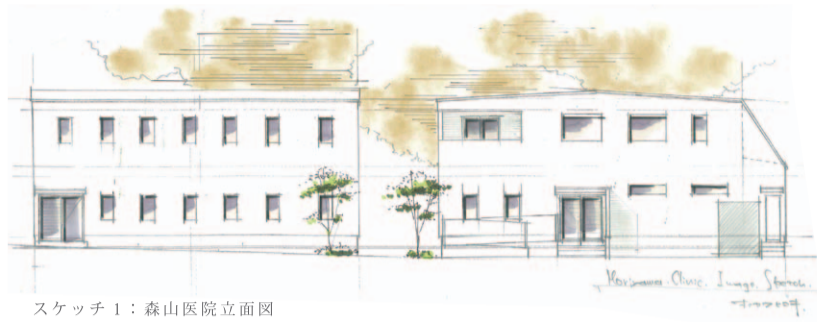


森山医院待合室から受付を見る。天然素材を使用したことにより、暖かみの感じられるインテリアとなっている。

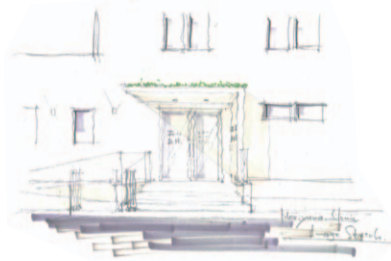
森山医院外観。まちなみのアクセントとなるよう、そして医院建築らしい白を採用した。エントランスの軒先は、緑化している。



森山医院平面図
回遊性のあるプラン、気持ちの良い位置に待ち合いスペースを設けている。



スケッチ1：森山医院立面図



スケッチ2：森山医院ファサード



スケッチ3：森山医院パース

「まちのお医者さん」

以前は、どこのまちにも商店街が存在し、八百屋さん、肉屋さん、魚屋さん、お花屋さん…色々な地域密着型のお店がありました。

そこで、買い物客同士が、または店主とお客とが、何気ない日常会話を交わし、その周りで子供たちが遊びまわる。そんな中から、同じ地域に暮らす者同士のコミュニケーションが成り立っていました。

しかし、それらの小さな商店は大規模スーパーや、コンビニエンスストアに変わっていくと、何気ない日常の会話が交わされる場所は消失していきます。

そんな中、今もまちなかに昔と同じように存在し、地域の方々からコミュニティとして必要とされている場所があります。それが、「まちのお医者さん」です。

「まちのお医者さん」は、医療機関としてはもちろんのこと、更に、地域の皆様がコミュニケーションを取り合う場としての活用が、現代社会では求められていると考えます。それは、冒頭で述べた「医療機関におけるパラダイムシフト」と大いに関係していることです。

この「森山医院」が、地域の皆様から愛され必要とされる「まちのお医者さん」となり、訪れることにより、癒され、元気の出る、まるで「癒いの庭＝ヒーリングガーデン」のような場所となっただけのように、デザインしております。

スケッチ3：
「癒いの庭-ヒーリングガーデン」をイメージした待合室のスケッチ。実際、ほぼイメージどおりの待合室が完成している。



見て、触って、感じる「エコ・デザイン」

使用する材料は、できるだけ環境に配慮したものの取り入れ、見て、触って、感じる「エコ・デザイン」となることを、意識しております。

例えば、待ちあいのインテリアはこれまでの診療所のイメージとは違い、天然素材を使用することにより暖かい印象となっております。色合いも、暖かみと清潔感の両立するホワイト～ベージュでまとめました。

空調はセントラルにて温度管理し、更に、強酸性水のナノ噴霧という業界初の設備を取り入れており、空気の殺菌や浄化に効果があります。

照明器具は電球寿命の長いLEDを極力使用し、屋根を緑化することにより、実際に目で見て、感じられる「エコ」を実践しています。

建築家 及川 洋樹

患者さんが癒され、元気の出る場所

Healing Garden

まちなみのお医者さん